

『原中最秘抄』の完本と略本

田 坂 憲 二

河内方源光行以下、親行・聖覚・行阿と四代に亘って集成された『原中最秘抄』は、鎌倉時代における源氏物語の研究史・享受史を考える上で極めて重要な資料である。同書の基本的性格については、既に別稿で明らかにしたとおりである。^(注1)

『原中最秘抄』には、現在二系統の伝本が存しており、それらは今日では完本系・略本系と通称されている。ところでこの両系統の関係については、従来ごく大づかみな捉え方や注釈の一部を抽出しての考察は行われているものの、総合的かつ大局的な把握はなされていないのが現況である。^(注2)そこで改めてこの問題を掘り下げてみることにし、両系統、就中、やや等閑視されるきらいのある略本についての位置づけを行いたいと思う。

猶、完本系の本文は尊経閣文庫本を使用し、阿波国文庫

旧蔵本の翻刻（『源氏物語大成』資料篇、原本は焼失）を参照した。略本系の本文は、蓬左文庫本を使用し、板本群書類従本を参照した。引用の際、適宜私に句読点を施し、一部通行の字体に改めた箇所がある。又、原文の返り点は若干誤りもあるため削除した。前田家本の表記は片仮名交り文であるが、比較の便の為、平仮名に直した。

一

『原中最秘抄』の略本は、その奥書にも明記されているように、耕雲山人・花山院長親によって抄出・整理されたものである。

原中最秘抄者、光源氏物語先覚行阿法師所撰述也、補苴紫明水原之罅漏、包羅和漢典策之旧事、可謂勤矣、今依台命、芟夷其繁辞、撮取其典故、以便後学之觀覽、

仍詠和歌二章、以擬跋語云、(和歌省略)

耕雲山人明魏

従って厳密な意味でいえば、略本は『原中最秘抄』のものではなく、『最秘抄』の異本・別本ともいうべきものである。しかし、耕雲は略本を纏めるに際して、依拠した『原中最秘抄』の原本の内容・構成を基本的に尊重しているため、完本(非耕雲抄出本)の欠を補う資料としての意味がある。

猶、『原中最秘抄』の伝本では、今日略本と呼ばれているものが群書類従に収められたため、早くより流布本的立場にあり、完本系の本文の発見は、尊経閣文庫本が大正年間に橋本進吉氏によって紹介される迄待たねばならなかった。^(注3) 従って完本なる名称は、あくまでも耕雲抄出本の存在を念頭においてのものであり、いわば略本の対立概念としての、相対的名称とでも言うべきものである。

『原中最秘抄』は、源氏物語より、難義語句の箇所を中心に、百余箇所の本文を抽出し、それに長短様々の注釈・考証を施すものである。この百余箇所の注釈総数は、従来指摘されている如く、完本・略本とも基本的には一致し、完本・略本の差異は、個々の注釈・考証部分の精粗・繁簡にあるのである。

そこで、以下の論述の便を考え、まず『原中最秘抄』の

全項目を掲げ、十字以内で私に内容見出しを付し、^(注4) 当該項目の抄出本文と注釈部分が完本・略本においてどのような関係にあるのかを記した表を掲げておく。
項目番号は、完本のそれであり、^(注5) 略本の欄において、一とするものは二項目が纏められているもの、欠とするものは現存本に見えないものである。注釈の欄において、Aは完本が詳しく略本はその一部又は要約であること、Bは完本、略本相互に補えるものがあること、Cは略本が詳しく完本がその一部又は要約であること、Xは完本・略本はほぼ同内容・同分量であることを示す。本文の欄のa b c xもこれに同じである。

完本	略本	見出し	本文	注釈
桐 1	—	大掖芙蓉未央柳	x	A
2		けうら	x	A
3		高麗の相人	a	B
4		大蔵卿蔵人	x	B
帚 1		たちろき	a	B
2		ひ、らぬ	a	B
3		中川のわたり	a	A
4		衣のをとなひ	x	C
タ 1		揚名介	x	B
2		しひらたつもの	x	C

葵	宴						賀									末		紫						
2	1	3	2	1	6	5	4	3	2	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1	3	2	1	4	3
八月十五夜																								
ふくいとくろく																								
金剛子の数珠																								
あつまをすか、く																								
にひいろ																								
わかむとほり																								
えひのか																								
いくそたひ																								
かねつきて																								
ひそく																								
ゆるし色																								
ふるきのかはきぬ																								
松の雪																								
からくしけ																								
御きさきことは																								
いりあや																								
この世のもの																								
母なき子																								
藤壺懷妊延引																								
なかのほそを																								
柳花宴																								
明王の御世四代																								
おほきみすかた																								
たひしかはら																								
大将のかりの隨身																								

x	a	x	x	a	a	x	x	x	x	a	x	a	x	a	x	x	x	a	a	a	x	x	a	a
B	B	A	A	A	B	B	X	A	A	B	A	A	A	A	B	A	A	A	A	B	B	A	C	B

少			松			繪	蓬		濤		明				須				賢					
1	3	2	1	3	2	1	1	2	1	2	1	4	3	2	1	5	4	3	2	1	6	5	4	3
をしかいもと	小鳥つけたる萩の枝	にはかなるみあるし	よるひかりけん玉	さしくしのはこ	くんえかう	御くしのはこ	丁こほちたる女	童隨身	内大臣	まくなき	かうれうといふ事	海龍王	むまやのおさ	屏風のおもて	おさめみかはやうと	文王の子武王の弟	白影はみし夜の秋に	白虹貫日	しはふるひ人	とのる物の袋	かうこのはこ	三日の夜の餅	いま／＼しき日	法界三昧普賢大士

x	a	a	x	x	x	x	a	x	x	x	x	a	x	a	x	a		a	x	x	x	x	c	x
B	A	C	A	B	B	A	B	A	B	A	A	A	A	A	A	B		B	A	A	A	A	C	A

若菜	4	3	2	枝	1	3	2	裏	1	3	2	真	1	3	2	行	1
				欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠		
一部内立上下事	しらつるはみ	みあれ	家札といふ事	四月ついたち	つるのほたし	右近陣のみかは水	孫王の御いましめ	さめきさはく	いまはとて	御めしうと	かたきいはほ	おちくりとかや	はねをならふる				
	a	x	x								a	a	x				
A	B	A	A								B	A	A				

(以上、上巻)

常	1	2	胡	1	3	2	玉	1	4	3	2
窓の螢枝の雪	寮試	御としみの事	かためつふれ	初瀬観音	のしひとへ	こしさし	孔子のたうれ	ことつひ			
x	b	x	a	x	a	x	x	a			
A	A	X	A	A	B	A	C	B			

上	2	3	4	5	下	2	3	横	霧	幻	2	1	2	3	4	雲	匂	2	紅	竹	2	橋	2	1	総	2	1	早	1	
おほいまうち君	くすしなどのさま	まことのおは君	仏の御弟子	しほれたる枝	あをしのかきり	こかのしらへ	つはるもち	たかうな	鳥のせうやう	むこんたいし	うなる松	風も吹よらし	よるへの水	此門はひろけ給はめ	有名題無真実	くいたいし	のりゆみ	かはふえ	のちのおほいとの	よそにては	しけきの中	月をまねく	海仙楽	紅におつる涙も	しなてるや					
x	x	x	x	x	x	a	x	a	a	a	x	x	a	a	a	x	a	x	x	x	x	x	a	x	a	x	a	x	x	x
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	X	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A

寄 1	2	3	手 1	夢 1	2
なに、か、れる				玉殿	
せんかうのおしき				すいはん	
わたし守か孫				以当卷号夢浮橋	
a	x	x	x	a	
A	A	A	A	A	A

(以上、下巻)

さて前表によって略本の全体的特色をみると、略本が完本よりも何らかの意味で詳しくなっている部分を持っているのは、ほぼ前半部分にのみ限られていることが分る。これは、現存完本と、略本の依拠した完本系の本文において、前半部（上巻）の差異の方が後半部より大きかったためであらうか。或いは、耕雲の執筆態度の差異によるものであらうか。後述する如く、文脈の解釈を耕雲自身が補ったと思しき箇所は前半部に集中し、「在河海集、仍略之」の類の表現が後半部に集中していることから、断定は出来ないが、耕雲自身前半部は詳細な作業を行ったものの、後半部はややきめの粗い内容になったという可能性の方が強いのではあるまいか。^(注6)

猶、略本において、真1裏1の部分が欠落しているのは、略本の祖本である現蓬左文庫蔵耕雲自筆本に起因するものであること、完本の注記二項目が略本では一項目に纏

められている場合は略本の方が妥当と思われること、については、阿部秋生氏によって詳細に検討されており、従うべきと思われる。^(注7)

さて次節以下において、注記部分の具体的検討・比較に入るが、その前に抄出本文部分について簡単にふれておく。略本では注記内容のみならず、本文引用の部分においても簡略化作業を行っている。略本で削除された部分は、注記内容と無関係の部分であり、概ね妥当な省略といえよう。二、三例をあげておく。カッコ内は、完本にのみ存する箇所、略本では省略されている。

○〔末6〕ゆるし色のわりなううはしらみたる（一かさねと、なこりなくくろみたるうちきかさねて、うへにふるきのかはきぬいときよらかにかうはしきをき給へり）

○〔葵1〕（あやしき）山かつたひしかはら（まで）

○〔幻3〕さもこそはよるへの水に（みくさるめけふのかさしよ名さへわするゝ）

二

本節では、略本奥書の言う「芟夷其繁辞、撮取其典要」とは、具体的にどのような作業であったのかということ、を、現存完本と略本との比較から明らかにする。

『原中最秘抄』は、百項目以上の難義注であるが、その一々の項目について、多数の有識者の言と、幅広い文献による証左を掲げながら考察を加えていく。完本によれば一項目につき十人にも及ぶ有識者の意見を併記するものもあり、又、四・五種の書物を引用する項目も少なくない。それらを略本では、ある場合は、一千字近くもの注釈をばっさりと削ったり（下2・こかのしらへ）、ある場合は、殆どそのままの形で踏襲したり（句1・くいたいし）しているのである。項目によって、省略される部分が、量的にはないが、質的にもその省略の方法は千差万別である。しかし、基本的には次に示すいくつかの型に分類できる。

まづ、次の(一)(二)に大別される。

(一) 特定の説・諸家の言・書物よりの引用そのものが省略される場合

(二) 特定の説、諸家の言・書物よりの引用などの全文が省略されるのではなく、記述分量のみが圧縮される場合

(一)の例としては、次のようなものがある。

○帚木3・中川のわたり

（完本）李部王記云、以京極河為中河云々、行成卿記云、法成寺を時の人称中川御堂云々、旧記云、賀茂川

を謂東河、桂川を西河といひ、京極川を中河と云々、御堂殿宇治殿この両所に京極川をへたて、おはしますによりて号中川也、小町集云、承香殿の宰相君里に出たるに、人のあるけしきなれは、かへるなりと中川に芹あらふ女して云りける、中川にすく田せりのねたきことあらはれてこそあるへかりけれ

（略本）李部王記^{兼明親王}云、以京極河為中河云々、旧記云、

賀茂河謂東河、桂河為西河、京極河為中河

完本では、中川の説明・用例として『李部王記』『行成卿記』『旧記』『小町集』の四文献が引用されているが、略本では、このうち『行成卿記』と『小町集』からの引用がない。これらの部分は、中川の名の由来を説明する際、必ずしも必要ではないと判断して削除されたものであろう。

○明石2・まくなき

（完本）……まくなきつくりてとは、定家卿説云、また、き歟、可尋勘と云々、基長卿説云、瞬目、ましろかす心也、経範卿説云、余雅喙者、小虫の乱飛也、但つくと云詞不審也云々……

（略本）……まくなきは、みたれとふ小虫也、蟻蠓也、……

この項目では、大宰帥の事や、まくなきの事例について後に説明がなされるが、「まくなき」についての説明は右

の部分である。略本は、定家、基長（飛鳥井氏、教定男）、経範（藤原氏、孝範男）の三人の説をあげるが、略本では、定家・基長の言説そのものが削除され、経範説のみが示される。（但し、経範の名は明記されない。その意味では(二)(2)④にも分類される。後述参照）

右のように、『原中最秘抄』の各項に併記される諸家の言や、書物よりの引用が、略本では省かれるのである。完本から略本への簡略化は、この形で行われることが最も多い。併記される諸説・引用の中から、重要と思われるものだけを残すのであるから、最も容易な作業であつたろう。次に、上記二分類のうちの(二)は、次の如く下位分類される。

- (1) 諸説の配列の変化を伴う場合
 - (2) 諸説の配列の変化を伴わない場合
- (1)としては、次の様な事例があげられる。

○行幸2・おちくりとかや

（完本）青鈍の細長を吉事に用事不審也^{可勘}……

ほそなかの事、或説云、いまた男まうけぬ女房の用之云々、可^(い)然人若は女御まいり后たちの時、おとなしき女房も着之、組にて紐を付たる物也、色々不定歟、行^(う)阿云、細長は上臈のおさなき御時の装束也、且^(え)は紫の姫君おさなかりし時無紋の桜とみえたり

（略本）青にひの細長吉事に用事不審也、……細長^(う)は上臈のおさなき時の装束也、又^(い)可^(い)然人女御まいり立后の時、おとなしき女房も着之、組にて紐をつけたる物也、色々だまらず……

細長の注に関して、略本は完本の（あ）説を略し（これは前述の(一)に該当）、更に、行阿云の中の一部分（え）を削除し、同時に、（い）Ⅱ行阿以前の人物の説、（う）Ⅱ行阿説を同次元のものとして、両者の順序を差しかえているのである。このような例は、それほど多くはないが、末摘花1・わかむどほりの項、絵合1・御くしのはこの項などにも見出される。

次に(二)の(2)は、更に五つの形に下位分類できる。順次例をあげながら示す。

- ① 大意を取って全体を簡潔にする場合

○須磨2・屏風のおもて

（完本）……屏風の面の絵の事、私云、於此物語絵のある方をおもてと用之条、無異儀歟、而後京極殿御説云、於源氏物語者画を面に用事勿論也、但宇多西宮両説也、宇多は蘇芳のかたを用、或は屋の母屋廂に屏風しつらひと云事あり、又大臣の大饗之時しかのことくしつらふ、車寄の四枚屏風は蘇芳の方を面になす、

両家の記各別也、而物語は西宮左大臣高明事を書載たり、然者絵の有方を面に用たりと見えたり……

(略本) 屏風の絵、おもてうら両説あり、此物語には絵のあるかたを面に用之、西宮左大臣絵を面にする義をもちふる間、此物語彼大臣事をかけり、一説は蘇芳の方を面になす、大臣大饗之時此義也、又車寄の四枚屏風、蘇芳を面にもちふる也、

略本は、完本の当該部分の記述を約二分の一に圧縮している。そのまとめ方は、中々当を得たものだが、削除されたが故に、西宮左大臣説に対する一説が宇多帝の説であることと、この両説について述べたのが後京極良経であることなどは、看取できなくなってしまう。右の例は、さほど大幅な圧縮ではないが、松風1・よるひかりけん玉の項では、完本の三百字強の注を五十字弱に凝縮している。

② 文章・語句の一部を抜いて簡潔にする場合

○若菜上2・くすしなとのさま

(完本) ……私云、寄生の巻にも、くすしなとのつらにてもみすのうちはさふらふましくや、とかく人つてなる御そうそこなんかいなき心ちする、とあり……

(略本) ……私云、寄木の巻にも、くすしなとのつらにてもみすのうちはさふらふましくやは、とあり
右は、くすしの用例として寄木巻の文章を引用している部

分である。完本、略本ともに、「私云、寄生の巻にも……とあり」の形まで完全に重なるが、略本では引用本文は半分に削られている。このように引用本文、又は諸家の説の後半部もしくは前半部がカットされる例は比較的多いが、中には次例のように、文脈の中途の文章・語句を適宜抜きながら分量を削るという例もある。

○若菜上3・まことのおは君

(完本) 祖母なり、(令云) 祖母をはおはは、祖父をはおほち、仍おちともおはとも云、仮名の字を略する事常のことなり、行阿云、物語のおもて(能々みるに)、まことの祖母明石尼君なとかまありつくへき所ともあらす、ささりながらはあれともまさしくおはと見えたり、(且は正字の読と云、謬処及にあらされとも) 此おはの字はな姫の字たるへき歟、又老姫と書て源順おうなと点せり、(又清少納言か枕草子に云、すさまじき物、霜夜の月おうなのけさうと書り、是も老女のけはひしたる也、而にこゝにてのおは君は) 中宮の御年のわかきに対して、明石の上を姫君といへるか、(此つゝきの詞ともにも、まことの母上は身のほとを卑下して紫上にゆつり奉りて、更啓養育と見えたり、之非可求例於外) 葵巻に源内侍のすけか事をいはんとて、おはおと、(の上ないたくかるめ給そ) とかけり、(是も) 年闌たる女の義

なり

右は、完本の本文をあげ、略本との相異を傍記の形で示した。カッコ内の部分が略本には欠けているものである。この事例においては、略本が可能な限り完本の本文を生かして用いていることが分る。次節でもふれるように、略本には明らかに『原中最秘抄』そのものから逸脱する要素も含まれているが、右の例などは、完本の本文から略本の本文が派生したことを如実に示すものである。同様の例は、玉鬘2・初瀬観音の項などにも見られる。

猶、以上の(一)―(1)、(二)―(2)―①②は、量的に言えば、大幅縮少の例であり、以下に述べる(二)―(2)―③④⑤は、小幅縮少の例といえる。

③ 私云、行阿云等、河内方の発言者名を略す場合

○末摘花3・いくそたび

(完本) えしま、しゝま^{誓言}とちかひて物いはぬ事也、又

無言、行阿云、四ヶの大寺の僧綱等勤公請之時、八講

論談之砌に、証儀判者聞問答之是非、磬を打て決勝負

……

(略本) えしま、しゝま^誓とはちかひて物いはぬ事也、

又無言、八講論義の時、証義者問答の是非をきゝて、

磬を打ちて勝負を決す……

完本では、八講論談の事例を持ち出して来たのが行阿であ

ることは明白であるが、略本では、発言者の名は示されない。実は、このような部分にこそ、完本と略本の特徴が最も良く現れているのである。完本の特徴、換言すれば『原中最秘抄』そのものの特色の一つは、誰が[・]発言したかというところにこだわり続ける点にある。つまり、極めて平凡な説であっても、その発言者が高名な歌人・公卿であれば、それらの人々から源氏物語に関する知識を集約したという点において、一つの権威づけになるのである。又、他方においては、発言内容・自派の説に対する所有権を主張するかの如く、私云・行阿云と細かく記されている。これに対して、略本の姿勢は、説そのものが妥当であれば誰の発言であつても良い、ということのようである。そこで私云・行阿云の部分が前例のように、しばしば省略されることになるのである。

④ 河内方以外の人物の発言者名が略される場合

③の例ほど著しく顕著ではないが、このような例もかなり存する。基本的には前項でみた略本における発言者の無[・]人格性の延長線上にあるものといえよう。もはや本文は引用しないが、その例をあげておく。葵5・三日夜の餅の項では、円明寺殿(実経)説が、賢木1・とのゐ物の袋の項では基時朝臣^{堀川中將}説が、それぞれ引用されている。略本も、ほぼ同様の内容を多少簡略化しながら述べてはいるものの、

円明寺殿・基時朝臣の名は示されることはないのである。

⑤ 引用書目名を略す場合

若菜上3・まことのおは君の項、総角1・海仙楽の項は、共に完本・略本ほぼ完全に重なるが、その出典、『当麻鴨継伝』・『貞保親王譜』の名は完本のみに記され、略本には示されない。特に、海仙楽に関する『貞保親王譜』(南宮譜)の文章は、逸文として貴重なものであり、略本のような形では出典不明として埋れさせてしまう恐れのあるものである。

完本から略本へと注記が圧縮される場合は、以上の何れかの型に分類できる。最も、何れか一つにのみ該当するものはむしろ少く、二つ以上の要素を併せもつことが多い。最後に、総合的事例を一つだけあげておく。

○幻2・風も吹よらし

(完本) (此事本に尺なし、行阿云)、唐(玉塵集云)、穆宗皇帝之時、宮中の名花の盛に帳を立帷を懸て(花を其内にし)風にあてず、叡賞ありき、是を括春と名付たり、奉行する官をは惜春御史と申侍也、(後撰集に、おほ空におほふはかりの袖もかな春さく花を風にまかせし)

右の文章中のカッコ内の部分を削除すると、概ね略本の本文となる。この削除部分を叙上の分類にあてはめると、

「行阿云」は(二)(2)③、「玉塵集」は(二)(2)⑤、「花を其内にし」は(二)(2)②、「後撰集」云々は(一)にそれぞれ該当する。

以上のように、略本の簡略化作業は実に多様な形態を持っている。耕雲は、様々な方法で完本系本文を圧縮していたのだが、その過程で、完本に記されていた多くの有識者の言や引用書が削除されてしまった。又、残された中でも、発言者名・書目が示されぬものも少くない。従って、鎌倉時代の源氏物語享受史を窺う資料として、略本の価値は完本に比して大きく後退しているといわざるをえない。

三

略本の注釈本文の中には、時として、完本より詳しい部分や、完本には見られない記述が存する。これは、一、略本の依拠した完本に本来存したもの、二、耕雲が新たに増補したもの、三、両方の可能性があるもの、に大別することができ。一つについては現存完本の欠を補う資料として活用できるし、二は耕雲の著述姿勢を窺う資料として使役できよう。本節では、このことについて考えてみる。

略本の方が完本よりも記述の詳細な場合も、その内容によっていくつかの型に分類できる。以下順次見ていくが、略本の方が詳しい事例は言うまでもなく少数であるため、

原則として全ての例をあげる。又、二つ以上の型に亘るものについても、重出させることとする。

① 源氏物語本文の他の用例を補う例

帚木4・衣のをとなひの項には、略本のみ「鈴虫の巻にも夏きぬのをとなひとあり、不審也」とある。同じく、若紫3・にひいろの項でも、略本のみ「紅葉賀の巻にも、まはゆき色にあらてをとて、くねなるうす色紫のちのかきりなどあり」と記される。他に、若紫2（若菜上巻の本文引用）の例がある。一方、逆に完本のみ到他巻の本文が引用され、略本ではその部分が存しない場合もあるから（葵2——梅枝巻の引用、など）、上記三例も、『原中最秘抄』に本来的に備っていた可能性が強いのではないか、と思われる。

② 本文内容・文脈等の解釈に関する説明を補う場合
賢木3・白虹貫日の項に、略本のみ「源氏を太子にたとへていへり、仍源氏はゞかりて、さきをしのひやかにをはする也」とある。同じく、玉鬘1・かためつふれの項、略本のみ「これによりて、かたき事をいはんために、なにかしはやめむと云歟」の部分を持している。二つの事例は何れも、文脈に即して理解しようという姿勢であるといえよう。

これらの注記は完本の注釈本文に比してやや異質ともい

ふべきものである。現存完本を見る限り、その注釈の根本は、あくまでも出典考証を中心とした難義語句の注解であり、謂わば準拠を明らかにしようとする姿勢である。そしてそれは『河海抄』以前の注釈に共通する要素でもある。これに対して、主に文脈の理解に意を用いるようになるのは、『花鳥余情』以降であることは言うまでもない。とすれば、この型の全てではなくともその多くは『原中最秘抄』本来のものではなく、耕雲の手によって補われたものではないだろうか。そして、略本は、準拠探究から文脈理解へと移行する注釈史の流れを示しているのではないかと思われる。

この型に該当するものとして、他に紫2・賀1・葵2・葵4・賢5・霽1・絵3・松1・少2の例が存する。猶、絵2・くんえかうの項で、略本のみ「またなきさまとは、いまたなき也、又とはよむへからす」と記しているが、これは『河海抄』の「師説云、またなき也、又とはよむへからすと云々」によって改めたのではないかと思われる。

③ 河内方の説を補うもの

夕顔2・しひらたつものの項に、略本のみ、
行阿云、堀河相国定実公説云、しらこしたつ物也、白腰也、からきぬの上にかけたる裳をしろこしと云也、海賦の裳桐竹ともにしろこし也、しろこし、此字をかきまきはしたる也

の部分がある。他にも「行阿云」「私云」で始る部分が略本のみに存するものとして、夕4・紫2・紫3・少1の例がある。これらは、耕雲の段階で附加されたのではなく、『原中最秘抄』に本来的に存していたものであることは言うまでもない。従って、『原中最秘抄』について考察を加える際、完本に補って使用されるべき部分といえよう。

④ 諸家の説を補う場合

夕1・やうめいのすけの項では、完本は、伊行釈を始めとして、二条良基に至るまで、十人以上の諸家の説を引用している。これに対して略本は、全体を五分の一以下に圧縮し、就中、師家・良経・道家以下、平安最末期から鎌倉時代にかけての撰家の説はことごとく削除してある。それは略本自体「秘義略之」と記しており、意図的削除である。ところで、その一方で、僅かに略本の独自部分が存する。「信西云、正権之外介也」の一文である。このことによつて、信西入道（藤原通憲）が、揚名介を介・権介以外の名目だけのものという穏当な理解を示していたことを知るこ

とができる。信西の源氏物語に関する発言は他に知られていないようであるから、貴重なものといえよう。猶、信西の妻紀朝子は、二十卷本源氏絵の作者に擬せられており、^(注11)『弘安源氏論義』の参加者で、『原中最秘抄』にその名の見える康能は、信西の六世の子孫であることから、その発

言も信西自身のものである可能性が強い。時代から言っても、『原中最秘抄』に本来的に備わっていたものが、何らかの事情で、現存完本では脱落したものであろう。

同様の例として、夕2（堀川相国定実公説Ⅱ○参照）・夕4・紫3・末5（俊成卿女説）^(注12)・紫2（和琴大夫教豪説）^(注13)がある。これらも『原中最秘抄』本来のものと思われる。

⑤ 書物よりの引用を補う場合

松風2・にはかなるみあるしの項で、略本のみ「日本紀云、主と云所に先飯と云り」の一文を有する。同様に、桐3（寛平御遺誠）^(注14)、夕2（延喜式）、夕3（唐書）、葵1（日本紀）なども、完本にない資料を引用する。^(注15)文献主義・実証主義は、河内学派、就中『原中最秘抄』の真骨頂であるから、これらの例も耕雲の増補と考えるより、略本の依拠した原『原中最秘抄』に存していた可能性が強いのではないだろうか。

⑥ 略本の方が説話・逸話的色彩が強い場合

○若紫3・にひいろの項

（完本）……軽服成時必鈍色計にあらず、火色紫などを用事ありと申侍りき、此儀もいはれ侍れば火色とも心得へき也、乍去俊成卿女申侍しは、もみちの賀の巻に外祖母之服三ヶ月之後除服云々 然間にひ色たるへしと云々

(略本) 私云、或女房、此物語の才学をたて、よみ待りしか、見給ふにと、にの字を上へつけて、ひ色のこまやかなるとそよみ侍し、且は紅葉賀の巻にも、まはゆき色にあらてをとて、くれなるうす色紫のちのかきりなとあり、彼の紅は則火色也、輕服の時も鈍色はかりにあらず、火色紫などを用事もあり、然は火色とも心うへき歟、さりながら、俊成卿女云、紅葉賀の巻に、外祖母之服、三ヶ月之後除服云々、然間にひ色たるへし云々

両本とも内容的に大差ないが「或女房、此物語の才学をたて、よみ侍りしか」とある略本の方が、源氏物語享受の場における逸話・説話的色彩がより強くなっている。略本のこの文体は、耕雲の手によって改められたものではなからう。とすれば、略本は、完本とは別系統の『原中最秘抄』の姿を留めているということになる。夕顔4・ふくいにくろくの項は、完本が、「種々説共略之訖」とあり、略本は俊成卿女が服喪説に固執したことを詳しく述べているが、^(注16)同様に考えてよからう。

以上、六項に分けて見てきたが、略本の方が完本よりも詳しい場合の内、明らかに『原中最秘抄』に本来的に備っていたと思しきものは③④、その可能性が強いと思われるのが①⑤⑥、耕雲の段階の増補と思われるものが②となる。

更に、略本には「源氏秘抄いろはのか文字部にみゆ」(行3)や、「在河海集仍略之」(下3・霧2・幻3・夢2)など、明らかに『原中最秘抄』以外の文献に言及したり、それに依拠して簡略化している箇所も存しているのである。

結局、略本のみに存する完本と異なる部分は、

一、略本が現存完本とは異った系統の『原中最秘抄』に依拠したために生じたもの

二、耕雲が略本を作成する段階で自ら加筆修正したものの、二つの次元の異なるものが存することが分る。

四

本節では、完本・略本を併せみることによって得られる知見について述べたい。

略本は、基本的には原『原中最秘抄』とは異ったものであるから、『最秘抄』を考える場合、第一級資料たりえない。しかし、完本系の伝本が何れも前田家本の転写本と思しきものであり、しかもその数も決して多くはない現状では、略本も比較校合する際の参考資料としては重要と思われる。

例えば、夕顔2・しひらたつもの項は、完本では次のような注釈を付している。

枕草子に、女房四五人はかりうす色のしひらかことは

かりゆひついたり、栄花云、褶、覆袴衣也、褶、女房

の装束のうへに着する、しひらうはもからも同事也、

然るに、今日の『枕草子』を見る限り「女房四五人はかり」云々の本文は存在せず、又「栄花云」以下のどの部分も『栄花物語』の文章としては相応しくない。この問題は次に示す略本の本文を参照することにより氷解する。

枕草子に云、もはおほうみのしひら、栄花物語云、女房四五人はかり、うす色のしひら、かことはかりゆひついたり云々、褶、覆袴之衣也、延喜式云、荷輿丁褶、私云、女房装束のうへに着之、しひらはもからも同事也

即ち、現存完本は、『枕草子』の「もはおほうみのしひら」が、何らかの事情——恐らくは転写の過程——で脱落し、更に「栄花云」と「女房四五人はかり云々」の部分が転倒現象をおこして『枕草子』に『栄花』の本文が直結してしまったために、何とも不可解な文章となったものと思われる。このことは、略本を併せ見ることによって容易に解決するのである。又、同じく「女房の装束のうへに着する」も、私（聖覚）の説であることを、略本によって知ることができる。

右の例ほど著しくはないが、略本の本文によって正しい形の字句が得られる場合がある。二、三例をあげる。カッ

コ内が略本である。

上 4 今（仏）此夜滅度、如薪尽火滅

横 1 春風吹起籜龍児、戢（戢々）満山人未知

紅 1 王卿有氣（酒氣）吹皮笛

このように、略本は『原中最秘抄』を検討する時に、校合資料として下可欠のものなのである。尤も、当然の事ながら、完本が正しく略本が誤まりの場合もある。例えば、末摘花 1・わかむとほりの項で、略本には、

浮舟巻、なまわかむとほりとは、うはそくの宮の御女、あつまやの君の事をいへり

とあるが、これは完本文の夢浮橋巻が正しい。又、橋姫 2・しけきの中の項で、完本は基政の「しけ木の中説」をあげ、それに賛同することを理路整然と述べるが、略本では一旦「繁き野中なり」と述べたあと、「一説しけ木の中なり」と述べ、結局「しけ木」説に落ち着くなど、かえって分りにくくなっている。

猶、内容的に相互補完するものとしては、紅葉賀 5・藤壺懷妊延引の項がある。ここでは、両本とも懷妊延引の例として、応神天皇・武内宿禰・羅喉羅の例をあげるが、更に完本は聖徳太子、略本では老子が加えられている。あるいは、『原中最秘抄』の一つの段階として、両者をも具備した形が存在していたと想定すべきかもしれない。

ともあれ、前節で見たように、略本は、完本を補う要素を有しており、それだけでも完本と併読されるべきものであるが、校合資料としても看過できないものである。

五

以上の考察の結果を簡単に纏めておく。

『原中最秘抄』の略本は、完本の注釈部分のみならず、注釈の見出しの本文も適宜簡略化している。又、注釈項目の中で、完本の項目の立て方に問題のある箇所は、改めている。

略本の最も重要な要素である注釈部分の簡略化については、多種多様な方法で要約に務めており、それらは二系二群五種に大別することが出来る。この簡略化作業の過程で、略本においては、有識者の発言・文献の引用が大幅に削減され、又、残された部分においても、誰の発言か、どの文献からの引用かを明示しない場合が多い。よって、『原中最秘抄』本来の、鎌倉時代源語享受の種々相をみる資料としては、その価値を半減させている。

略本には、現存完本よりも詳しい部分も若干存するが、これらについては、(一)現存完本とは系統の異なる完本を基にしたことによる部分と、(二)耕雲が『河海抄』『仙源抄』等、『原中最秘抄』以外の資料によって改めた部分とに大

別される。

略本自体を『原中最秘抄』そのものとして使用することは出来ないが、現存完本を補う部分も存在し、現存完本の対校本文とできる等、一方で捨て難い価値を持つものである。

注

- (1) 拙稿「『原中最秘抄』の基礎的考察」(『中古文学』37、昭61・6)

- (2) この問題について比較的纏った考察をしているものは次の二書である。

○重松信弘氏『新攷源氏物語研究史』(昭36)

○阿部秋生氏『日本古典文学影印叢刊』19「原中最秘抄・解題」(昭60)

- (3) 「源氏物語研究史の新資料」(『国語と国文学』大14・10)

- (4) 略本には目次(目録)が付されているが、長文に亘るため、改めて私に作成した。

- (5) 卷名の略記の方法は、(注1)拙稿に同じ。

- (6) 因みに、完本と略本の上・下巻の丁数を比較してみると、完本(前田家本)は上巻55丁・下巻61丁と、下巻がやや多いのに対し、略本(蓬左文庫本)では上巻39丁・下巻29丁である。奥書の長短や、略本の落丁の可能性を考慮しても、量的に見る限り、略本下巻は大幅に圧縮されているといえる。

- (7) 阿部氏(注2)書。

(8) 夕顔 4・揚名介の項、若菜上 5・しほれたる枝の項など。
(9) 『小町集』として引用されているが、実は『実方集』所収の和歌である。

(10) (注 1) 拙稿参照。

(11) 稻賀敬二氏「『源氏秘義抄』附載の仮名陳状」(『国語と国文学』昭 39・6)

寺本直彦氏「源氏絵陳状考(上・下)」(『国語と国文学』昭 39・9、11。『源氏物語受容史論考』所収)

(12) 森本元子氏『俊成卿女の研究』(昭 51) 参照。

(13) 重松氏(注 2) 書参照。

(14) 阿部氏(注 2) 書参照。

(15) 他に、出典は示さないものの、「つるはみの衣ときあらひまつち山」(万葉集)の引用などがある。

(16) 重松氏(注 2) 書参照。

(17) 「しけきの中」に両説あることについては、(注 1) 拙稿で考察を加えた。

〔付記〕

本稿は、昭和六十一年度文部省科学研究費助成金(奨励研究 A)による研究成果の一部である。